

# 詩

元気が  
一番夏



令和五年  
六月  
か

## 追憶の一億二千万光年

東京都(元井之内) 山下 佳恵

二〇二二年一月上旬

地球から一億二千万光年離れた巨大な恒星の最期がリアルタイムで観測されたというニュースが流れた

その赤色巨星は

研究チームが見守るなか

劇的な自己崩壊をして超新星になったという

光が一年間に進む距離を一光年だとしたら

それは一億二千万年前の出来事

地球は白亜紀前期で

恐竜の全盛期

そんな時代の出来事を

人類が見つめている

その恒星は

超新星爆発を起こしたあと

残骸が

宇宙に

バラバラに散り

漂い

また新しい星をつくっているかもしれない

地球は

私たちは

どこかの星の忘れ形見

偶然と

奇跡と

なにかの運命が重なって

いまがある

気が遠くなるような時間が流れても

いつまでも繁栄し

生き続けているものがないことを

いつか終わりがくることを

思わざるをえない

そのニュースが流れた一月の下旬には

終末時計が

一〇〇秒をきったと伝えられていた

## 細い月の光のように

東京都(元井之内) 山下 佳恵

漆黒の空に 細い月が浮かぶ  
消えてなくなりそうな月に亡き父を偲ぶ  
もう 三十年以上も経っているというのに

今夜が峠です と

病院に親族が集められた

ドラマの眠るような最期とは ほど遠く

父の手足はベッドの柵にくくりつけられている

起き上ろうとしては 倒れ

起き上ろうとしては 倒れ

なんども なんども繰り返す

力が尽きて

寝たままになったかと思ったら

お母さん！ と突然叫びだした

お母さん

お母さん

亡き母親が迎えにきているのだろうか

三途の川は本当にあるのだろうか？

声はかすれていき

心電図の山が平らになった

お母さん！ と叫びだしてからは

あっけないほどの最期だった

父は

生前の業の深さによって変わるといふ三途の川を

橋で渡れたのだろうか

私は

橋で渡れるだろうか

父の亡くなった歳を追い越した 今

これまでの人生を振り返る

人生一寸先は闇

漆黒の闇にのみ込まれずに

人生を終えることができるのだろうか

あの細い月のようになって

光を失わずにいられるのだろうか

怒らせているのは

美杉野 成毛 せつ

地球を

怒らせているのは誰でしょう

炎暑です

山もみじが黄ばんだ葉をゆるがせて

怒っています

梅の木が

ちっぽけな実なんだよと

怒っています

あじさいが

まったく雨が降らなかったと

怒っています

炎暑です

地球がいちばん

怒っているのです

でもでも

山もみじを

梅の木を

あじさいを

祈り―限りなき空に

美杉野 成毛 せつ

へだたりなく広がる天空を  
日本の山武の一五米ほどの天空をも  
さまざまにおち沈む夕陽

キッチンの出窓一間半

西北に大きく開かれた窓

調整池を越えて

元気館のプールと

みどり茂れる木々の間

この狭きすき間の

天空を舞台に

おちゆく太陽の寸劇が開かれる

地球に生れくる  
子らたちよ  
喜々として遊べ  
限りなき空に大地に海に  
眠れ 深く眠れ

一片の雲なき小天空を赤々と焦がし

一気に轟然とおち消え去るサンセット

天空をバックに

刻一刻と変容する雲と

変幻自在にたわむれ転びおちるサンセット

ロシアもウクライナも

# 朝

市原市(元富口) 村上 久江

いや もっと単純に

母親という

己が如来のような人に反撥したか

玄関の扉の向こうの

きみの仕草に じっと

耳を傾ける

出勤の忙しい刻

何秒かが過ぎる

それぞれが玄関の鍵を掛けて出掛ける

きみとわたしの日日の約束

きみは わたしの産み育てた子供

現在 きみは独り身

食事をしてるきみに きみの部屋の

クーラーのスイッチを切って

出掛けてくださいと

丁寧をお願いしたのだが

カチリ

きみは鍵を掛けて出掛けた

きみの 半世紀近くを生きて来た

変幻自在と優柔不断をもちあわせた

脳髓を刺激したか

きみは ふいと

記憶のなかの 幼い日の

# ローカル車は走る

市原市(元富口) 村上 久江

ローカル車は走る  
揺れるにまかせて走る

軌道はたしかだ

運転をあずかるものは

いつだって真剣で

足をふんばり 胸のうちに

固い心張棒を据える

走る前方や 一瞬に遠のいていく風景は

晴れ晴れとして豊かだ

黄金の稲穂は風に光り さざめき揺れ

やがて 薄紅色の花穂をともし薄

前へ先へと文明は突き進む

緑の樹樹が森のように重なる

ぐるりの地平線の その内には

ざらざらと通過していく

文明の音に脅えでもするように

小さな家家の窓は固く閉ざされて

ああ カーブだ

軌道は正常だ

ローカル車の生命の炎が燃える

ローカル車は走る

揺れるにまかせて走る

ゴンゴン ガタガタ

ゴンゴン ガタガタ

幾年月ローカル車を支えてきた

鋼はがねのレールが

さあ 今日元氣よく走ろう

無心の夢に走ろう と

うたっているようだ

ラストドライブ

木原 武藤 初夫

君の明るさと勇気が

そっと受けとめてくれた

チツチツチツと聞こえてくる音

いのちを刻む大事な時間

「ありがとう」

「ラストドライブ」

どんなに痛くても

行きたい意志は変わらない

君のほほえみは

僕に一滴の水をあたえてくれた

やりたいことが

自らのいのちに火を灯す

・日本テレビ「ディア日本」を見て

「花が見たい」

大切な人と見る一まいの絵

花の織りなす

朱色と黄色のファンタジー

緑色の生への光

## 親愛なる君たちへ贈る言葉

木原 武藤 初夫

今日一日 ごくろうさん！  
そしてありがとう

おはようではじまり  
さようならでおわる  
ふつうの一日に感謝

教室は君をまつている場所  
二番目のおうちさ

みんないっしょだよ  
友だちはそばにいるよ  
それに気づかないだけさ

涙はうれし涙がいいな  
だって悲しみを  
流してくれるもの

一日やっと終わった  
一日中つき合ってくれた  
身体からだと心こころにありがとう

## 四時偶成

九十九里町(元市内在勤)

齋藤

功

久しぶりねと無沙汰詫ぶ  
出会えばなぜかあな嬉し

めでたくまばゆき初日の出

果てなく続く白き波

あつという間の人生か

お屠蘇にお盆で歳忘る

九十九里の海岸初日の出

疫病退散祈りつつ

元日屠蘇を飲み干せば

はやくも梅咲き春嬉し

朝靄うつすら雨上り

鳥の鳴き声 柳の芽

波立つ海の彼方より

住まいは浜辺の砂径いながみち

梅の香 鶯鳴く朝に

春の小径は絵のように

小径の梅は春景色

うぐいす どこかで鳴きだした

なかよき夫婦は長生きさ

ご夫妻この春 卒寿とか

お庭にしとしと雨が降る

紫陽花染まり梔子くろなしも

患い籠ってはや半歳

はやくお外に出たいもの

蝉がミンミン 百日紅

お日さまジリジリ 入道雲

海辺の巖は 吾が住処

潮騒聞きつつ まどろみぬ

退職

九十九里町（元市内在勤） 齋藤

功

白里春潮潤徑塵 白里はくりの春潮しゅんてう 徑塵けいじんを潤すうるほ  
鶯聲遠近萬枝新 鶯聲あうせい 遠近えんきん 萬枝ばんし新あらたなり  
浮生華甲一炊夢 浮生ふせいの華甲くわかふ 一炊いつすいの夢ゆめ  
今晚辭官爲野人 今晚こんげう 官くわんを辭じし野人やじんと為なる

## 人生

森 佐藤美保子

思案が止まれば落ちてしまふ

無駄に動くまいとするときもあつた  
それも一つの人生の通過点だつた

太陽と青空は公平にあつても

周りの空気や動きは変わるから

読み方 出方ひとつで

失敗と後悔と沈没に

人生に終盤はない

毎日身が少しずつ変わるだけ

気づけぬことも一日のうち

分かっているのは毎日を大事にして

一日一日を精一杯生きること

年のせいか一日はせわしない

昨日の今と変らぬのに

体は微妙で敏感だつたり鈍感だつたり

頭の中身は減るばかり

増えるは忘れて出来ぬこと

年とシワの歩みは早い

当たり前前に昨日の続きを生き

今日は今日の一日をつくる 生きる

雨風に流されたり浮かんだり

流木につかまったり

昨日の人生とまるで違つた今日一日

立ち止まったら前はないと

夢中だつた

そんな人生もあつた

どうするか

## 過去

森 佐藤美保子

思い出を呼び戻そうと

手繰り寄せれば手応えなし

遙かかなたで待つてるよ

おしまいになったことは終わったこと

今があれば過去はいらない

時代も声も影もなし

ぼっかり暗い穴の中

どうしたら過去へ戻れるの

今更元に戻ってどうするの

拘わらないこと、忘れなさい

闇の声

風が耳元で諭す

過去は静かに眠っている

頭から心からスイスイ抜けて何も無い

長年の証しがどうしたの

無駄なこと心は軽くしときなさい

自ら振り払った過去もあつたでしよ

今日一日生きる力があれば

それで十分

ヨロヨロ今日一日を生き

明日は過去へとつなぐ

誰もが汗して現世の幸を求め生きる

生きることは仕事の山

年なり体なりの仕事を少し

溜息を笑いに変える今更に

甘い夢は消える

太陽は公平だ 少し希望を温める

風が通り過ぎる

人は過去作りに忙しい

## 鳥よ

森 遠藤三千代

春の暖かい日ざしのなか  
一人縁側のイスに座る  
外は静かだ  
夜明けに  
にぎやかな鳥に起こされた  
庭の草とりで  
少し疲れが残っていた  
ゆっくり朝寝をしたいのに  
どこで息つきをしているのか  
長く高い声である  
長い時間鳴いている  
今はいない  
どこへとんでいったのだろうか  
コックリ コックリしながら  
私は待っている

暑い夏がきた

あの鳥が毎朝にぎやかに  
起こしてくれる  
どこで息つきをしているのか  
長く長く高く鳴いている  
暑さが倍になるほど  
鳥よ この暑い毎日  
どのようにしんでいるのか  
私は一日中クーラーのなか  
あ  
畑にスプリンクラーが回った  
水が勢いよく降り注いでいる  
明日の朝はもつと  
にぎやかに鳴くことだろう

# 伊勢物語逍遙（その二十五）

八十二 渚の院

壇谷 大掛 史子

清和天皇の異母兄にあたるこれたがのみこ惟喬親王

山崎の向こう水無瀬の離宮で桜の盛りを過ごされ

いつも親戚筋の右馬頭うまのかぶ業平を連れて行くのだった

鷹狩は余り熱心にされず

もっぱら酒を飲み和歌を詠む

わけても交野かたのの渚の院の桜は風情この上なく

人びとは馬から下り身分にかかわらず

桜の枝を折って髪に挿し歌を詠んだ

右馬頭業平が読む

世の中にたえてさくらのなかりせば

春の心はのどけからまし

世の中に桜がまったくなかつたならば

散ってしまう花を惜しみ心配することもなく

春をめぐる人の心はのどかなものでありましょう

すると別の人が読む

散ればこそいとど桜はめでたけれ

憂き世になにか久しかるべき

散るからこそますます桜はすばらしいのです

憂い多きこの世に何が久しく止まっているでしょうか

何もないではありませんか 散るのは当然

ですから短い桜の盛りを愛すべきです

こうして詠みあつていると日も暮れ一行は桜から離れた

お供の人が酒を持って野の中から姿を現わしたので

この酒を飲もうと酒宴の場を探すうち

天の河という所に行き着いた

業平が親王にお酒をおすすめすると

「交野を狩し天の河のほとりに来た

これを題に先ず歌を詠み盃はその後だ」とおっしゃる

そこで業平は詠んでさしあげる

狩りくらししたなばたつめに宿からむ

天の河原にわれは来にけり

狩をして一日の暮れた今夜は織姫さまに宿をお借りしましょう

せつかく天の河原に来たのですから

親王は業平の歌をくり返し朗誦なさるが

余りの巧みさに返しの歌が一向にできない

お供に控えていた紀有常が代わって詠んだ

ひととせにひとたび来ます君待てば

宿かす人もあらじとぞ思ふ

一年に一度だけ逢いにくる方を待っている織姫さま

いくらくここが天の河でも他の人に宿は貸さないでしょう

親王は水無瀬にお帰りになり離宮に入られた

酔って物語りののち寝所にお入りになさろうとすれば

十一日の月がまさに山の端に隠れようとす

業平が詠む

あかなくにまだきも月のかくるるか

山の端にげて入れずもあらなむ

あかず眺めていたいのに早くも月は山の端に隠れるのか

山の端が逃げて月を入れないようにしてほしいものだ

親王にかわり紀有常が返歌を詠む

おしなべて峰もたひらになりななむ

山の端なくは月も入らじを

峰々がみな平らになってほしいものだ

山の端がなければ月も入りようがありませんから

## 五合庵の良寛

埴谷 大掛 史子

持っていかせてしまった

ふとんをかついで去る泥棒のあとに明か明かと月

「泥棒に盗り残されし窓の月」

コツコツコツコツコツコツ

水鶏くいなが板戸をたたく

お目覚めですか 夜が明けました

とつくに目覚め

結跏趺坐けっかふざ瞑想していた良寛さんは

板戸を開け放ち

樹木や花、鳥や獣すべての生命に挨拶する

おはよう今日も日の恵みがありますように

庵にあるただ一つの器鉢の子を手に降り立つと

岩の割れ目の清水を汲み顔を洗い口を濯ぎ

それを手にしたまま托鉢に出かける

清貧無一物余分なものは何もない

必要なものさえない

ただ一組の薄いふとんは

夜中に侵入した泥棒が

盗む物のないのにいらだつ気配に

わざと寝ているからだをずらし